

ついている。そして、「健康」「文化」という、人間存在必須の課題への挑戦と言える。各地で「コミュニティレストラン」を作り、健康レストランとして展開するだけでも、上記の課題をどう具体化するか、が見えてくる。これらの具体化を働きかけ、支援し、交流する結び目の役割を果たす労協連合会でありたいと思う。そしてこれらの課題を、国の機関や自治体との新しい関係作りとして指し示していきたい。

生活と地域に深く根ざす事業展開は、組

合員一人ひとりにとっても主体的な課題である。この機会に、思い切って協同労働・仕事おこしと、組合員の生活との距離を縮め一体化することに、力を傾注したい。そしてこれこそが、個々人の発想を高め、主体性を高め、組織への結集を高める不可欠の課題である。今一度、「協同労働」とは何か、そして「労協は何を実現しようとするのか」を問い会う中で、新しい峰を築く123運動を進め、6月の広島での総会・総代会に臨みたい。

研究所たより 研究所たより

2/5にNHKスペシャルで放映した「フリーター漂流～モノ作りの現場で」という番組を観ました。現代のフリーターの、フリーでも何でもない希望のない「働かされ方」を端的に示した内容でした。

番組では、全国から集められ、派遣ではなく「請負」業者から送り込まれた20～30代の若者が、栃木県の通信機器工場で多品種少量生産の仕事量の増減に合わせて2、3日ごとに、携帯電話の組み立てなどさまざまな仕事を細切れにやらされていく様子が紹介されていました。商品の売れ行きなどが、日単位で生産を変えていくのが今の製造業の実態であり、工場の「本工」で対応できない、変動量の多い仕事をすべて「請負」に外注しているそうです。

派遣法の改正で製造現場にも労働者の派遣ができるようになったのは、最近のことですが、企業内請負(ある部門を丸ごとアウトソーシングする)にすると、さらにフレキ

シブルな、つまり労働者にとっては企業の都合に合わせた働き方が可能になるということらしいです。

まさに、労働のjust in time、これ以上ないほどの細分化です。しかも、どんな仕事でも、すべて時給900円です。番組では触れていませんでしたが、社会保険には入っていないでしょう。労働法規違反の疑いもありますが、企業側も顔や作業服のネームも含め、すべて映していましたので、もはや当たり前の世界なのですね。

結果、かなりの割合で若者は辞めていくのですが、するとまた新たに仕事のない地方(北海道とか)から人が送り込まれてきます。

見ていて、頭の中に「ドナドナ」のメロディーが鳴り響くと同時に、無茶苦茶身につまされ、そして腹が立ちました。

最近、ニート(Not in Education, Employment, or Training)という規定で、

「働く気のない若者」が抽出されていますが、無業の若者にこのような仕事でも「我慢して働け」と諭すことは私にはできない。

もちろん女工哀史の時代から鎌田慧まで、工場労働における悲惨な状況はありました。そして、そうしたつらい仕事の中に何とか人間性を確保しようという、資本の側、労働の側両面からのアプローチも歴史的にはあったはずですが。しかし、現代の製造業では、企業はまさに労働力を生産の一部としか考えないわけですね。

番組の中では、北海道から来た35歳の男性フリーターが、その仕事の展望のなさに仕事を辞め、故郷に帰るのですが、実家で待っていた年老いた父親が「我慢して働いていれば、誰かが認めてくれる」と諭すシーンが出てきます。しかしかつて、誰もが信じていた「真面目にコツコツ」という労働の倫理は、現代のフリーター労働の現実の前には、あまりにむなしく響きます。

携帯の新機種に飛びつく若者たちの足元には、こんな労働が100万人という単位で広がっているのです。ニート対策に税金を使いながら、労働の規制はどんどん外していくのは、社会政策的には全く不合理ですし、それ以前にとにかく腹が立ちます。フザケルな！組合をつくって闘うべきです。

と言ったところで、そんな風には今のご時世では若者は立ち上がりません。結果として、引きこもったり、働かなくなるわけです。日本経団連は労働の更なる規制緩和を主張していますが、結局それは社会を荒廃させ、治安が悪化し、管理社会化が進み、はけ口としての戦争への道が開かれるでしょう。

菊地 謙